

創られる歴史像－近現代に見る タイの国家意識－

吉 川 利 治

1. ラームカムヘーン王碑の偽作説

1987年、オーストラリア国立大学で開催された International Conference on Thai Studies でヴィッカリー (Michael Vickery) が発表した研究報告は、13世紀末にタイ語で刻まれたタイ最古の碑文とされている、有名なラームカムヘーン王碑を取り上げ、「ラームカムヘーン王碑文は東南アジア史のピルトダウン人の頭蓋骨か」という衝撃的な題名であった¹⁾。ピルトダウン人の頭蓋骨とは、イギリスはサセックス近くのピルトダウンで1912年に発見された頭蓋骨が、旧石器時代の最古の人類とされたものの、1953年にその頭蓋骨は贗物であると証明されたものを指す。ヴィッカリーは歴史言語学の立場から、タイ諸語の音韻変化の歴史的特性を説明しつつ、スコタイ時代のタイ語碑文が一般に声調表記があいまいで、かつ不規則であるので、発展段階にあったと推測されるのに、同時代のものではラームカムヘーン王碑文だけがきわめて規則的であり近代的である点、タイ文字の母音符号を子音文字と同列に並べる特異性、タイ文字の頭子音字の用い方が音韻変化の原則性から不自然である点、また内容についても、スコタイ文字がすでに文字を持っていた周辺のタイ諸語の表記法の影響を受けていたと推測されるのに、碑文ではラームカムヘーン王がはじめて発明したと刻銘されていることなど、ラームカムヘーン王碑文の特異な性格をあげている。ほかのスコタイ碑文との矛盾、現地の事実との矛盾をはりみながら相似するのは、ラームカムヘーン王碑文を後の碑文が引用模倣したからであるといわれてきたが、むしろ逆に同時代の碑文の内容をまねたものではないか、という疑問を呈した。ヴィッカリーは論文の中で、すでにこの碑文に疑問を持ったタイ人研究者の説を紹介しているが、とりわけピリヤ・クライルーク (Phiriya Krairiksh) が「意図的な歴史上の偽作であるときっぱりと論じた」と高く評価している。

ヴィッカリーはピリヤの論点を1986年の研究者向けタイ語雑誌の論文に見いだしているが、タイ国内で大きな論争を巻き起こしたのは、1988年にピリヤがタンマサート大学の講義録として『ラームカムヘーン王碑：美術史学的研究』²⁾を著し、それをもとに『ラームカムヘーン王碑』³⁾という著書を1989年に出版したときであった。著書は美術史学者の立場から、碑文の記述と現地の事実との矛盾撞着、同時代の他のスコタイ碑文との比較検討からの相違・特異性などを理由に偽作であるとした。さらにピリヤは論文「ラームカムヘーン王碑」⁴⁾において、陋習を改革して近代化し、西洋風の文明に適合させるため、王室独占貿易から自由貿易へ切り替えるため、また王を神の化身とみなす神王思想から王を父とみなす家父長的温情主義政治へ

の転換のためなど、その歴史的根拠となるように作られたとし、碑文が語る内容とそれが意味する思想は、19世紀初期のタイを反映させているとして、その作者は、1833年にラームカムヘーン王碑を発見したとされているモンクット王子（後のラーマ四世）その人であると断定した⁵⁾。モンクット王子は20歳で出家し27年間僧籍にあって、その間、タイ伝統の学問としてサンスクリット・パーリ語、仏教、占星術を学ぶ一方で、フランス人神父、アメリカ人宣教師らと交流をもち、西洋の科学、天文学、英語をいち早く学んだ卓越した学者であり、19世紀中葉のタイを開国へと導いた開明君主であった。タイ語の著作を数多く残している王であるが、不思議なことに、王子の時代にラームカムヘーン王碑を発見し、バンコクにもたらしたとされているが、その経緯については一言も書き残していない。

ラームカムヘーン王によるタイ文字が生まれて700周年にあたる1983年には、タイ文部省芸術局やチュラーロンコーン大学を中心に祝賀行事が行われ、タイ文字にかかわる様々な出版物が刊行されていた。それから数年もたたず、想像もしなかった国内外からの偽作説に、タイの歴史学界は騒然となった。タイの歴史学者や美術史学者が反論し、いくつかのセミナー、シンポジウムが開催された。なかでも学界の大御所である碑文学者プラースト・ナ・ナコーン博士と美術史学者スパトラディット・ディッサクン親王を招いて開催された1988年11月16日のシンポジウム、現国王の姉カンラヤーニーワッタナー内親王が主催された1989年3月4日のシンポジウムは、その内容を伝える記録が出版されている。タイ知識人の関心の高さを示すものであった。

タイの学術団体サイアム・ソサエティーの評議会議長であるカンラヤーニーワッタナー内親王はシンポジウムの冒頭に挨拶し、「今回のシンポジウムは第一基碑文〔ラームカムヘーン王碑文〕が本当に古いものなのか、後世に新しく作りだされたものなのか、を明らかにするためであります。そして、そのような新しい考え方がどうして生じたのか知りたいと思う方々がいるでしょうし、それに同意しない方々はそれぞれの見解を表明したいはずだと考え、その機会となるように私が企画いたしました。そして、第一基碑文に関して疑念を抱く方にもまた、その個人的見解とその理由を述べる機会を与えるべきだと思います。聴取者はそれを後程検討できるというわけです。今回の第一基碑文を分析し研究するためのシンポジウムは、学術的な討論であるのみならず、『ラームカムヘーン王碑』の名前で良く知られた第一基碑文に対するタイ人の精神的きずなにかかわる内容を検討するものです。なぜなら、この碑文の内容は学校で習い始めるタイ史のなかのスコタイ史そのものであるからです。そうしたことからタイ人は第一基碑文がタイの歴史、文化、哲学、道徳に深い意味をもっていると思っています。しかし、

たとえ第一基碑文がラームカムヘーン王の時代に刻まれたものでないとしても、タイの歴史や文化が抹消されることを意味するのではなく、むしろ、この碑文に対して、今後の実りある研究で新たな視点、見解を提供するものと、私は考えます。」⁶⁾ 内親王による企画という意味あいと、挨拶のことばからうかがえるのは、まず、ラームカムヘーン王碑の真偽問題にタイの王室が重大な関心を寄せている点である。学問的な議論の場を設けつつも、碑文は学校教育の場で教えているスコタイの歴史そのものであり、文化、思想、道徳に至るタイ固有の精神文化の拠り所となっていて、いまや不可欠な存在になっていることを強調している。それでも、偽作説を抹殺するのではなく耳を傾けてみようという配慮と、真偽論争を学問研究の場にとどめ、できればより建設的な見解を導き出し、補強したい、という願いが感じられる。

タイ国内でのラームカムヘーン王碑の真偽論争は1年以上続いていた⁷⁾。サイアム・ソサエティーは外国人研究者による真偽論争の論集 *The Ramkhamhaeng Controversy* を1991年に出版し、シリントーン王女が後援する歴史学協会 (The Historical Society) は1992年に、サイアム・ソサエティーのジャーナルに数年にわたって掲載されてきたプラースト・ナ・ナコーン博士 (Prasert Na Nagara) とグリスウォルド (A. B. Griswold) とのスコタイ碑文研究の一連の論文をまとめて復刻出版し、巻末にプラースト・ナ・ナコーンのヴィッカリーへの反論を掲載した。その後は圧倒的な本物説によって、本物を主張する多くの学者に論破されたかのように、偽作説がかき消されたようになって、1994年現在では真偽論争は鎮静化してしまった。

本稿ではラームカムヘーン王碑の真偽論争に立ち入る意図はなく、ラームカムヘーン王碑が本物であろうと偽作であろうと、後にラーマ四世として即位するモンクット王子が発見したという19世紀中期以降のタイにおいて、カンラヤーニーワッタナー内親王のあいさつにみられるごとく、ラームカムヘーン王碑の出現がタイの古代史を明らかにし、タイの伝統的精神文化を創造してきたとすれば、ラームカムヘーン王碑の出現以降にどのような歴史像が造り出されてきたのか、ラームカムヘーン王碑文がどのような役割を担ったのか、ラームカムヘーン王碑をめぐるタイの指導的立場にある人々の言説の構図を探り、タイが描く歴史像から、自己認識の構造を分析し、近代国家としての意識がどのような歴史空間に生まれてきたかを考察する。

2. ラームカムヘーン王碑の発見と解説

タイ語最古の碑文ラームカムヘーン王碑がラーマ四世の偽作であったにせよ、発見されたものであるにせよ、世に紹介されるのは、19世紀中期、西洋からの衝撃を知的に対応したラーマ

四世によってであった。1855年に通商航海条約締結のため、バンコクを訪問したサー・ジョン・バウリング（Sir John Bowring）に、ラーマ四世はラームカムヘーン王碑文を模写して、「これらの文字は碑文から写しとったものであります。私は貴殿に差しあげるために英語に翻訳しはじめました。しかし、現在はまだ訳し終えていません。全訳できましたら、早速お送り致します。貴殿が所望しておられるので、私は私の弟であるウォンサーティラートサニット親王とで、1350年にアユタヤを都として始まったシャムの正しい歴史と、私がかつて貴殿に書き著したものよりも詳しい王家の歴史を著す準備を進めています。⁸⁾」と書き送っていた。碑文の最初の一行目を英語で逐語訳して書き込みを施したラームカムヘーン王碑文の書写が、ラーマ四世からバウリングに贈られていた。そのコピーはバウリングの著書 *The Kingdom and People of Siam* の第一巻に掲載されている。書き込みの逐語訳は正確に解説されている。バウリングは自著で、「プラ・クロム・ラーム・コムファン王〔ラームカムヘーン王〕はアユタヤ建設に先立つ66年前の西暦1284年にシャムのアルファベットをもたらし、シャムの北方の卓越した王として知られている。⁹⁾」と紹介している。ラーマ四世による碑文の全訳やシャム史などの著作は現存していないが、ラーマ四世はアユタヤ王朝以前にアユタヤの北にタイ族の王朝があり、優れた王がいたことをイギリス人使節に紹介していた。ラーマ四世は同じ碑文の写しを1856年にフランスの使節にも渡していたという。ところが、ラーマ四世はタイ人向けに碑文の紹介はおろか、発見のいきさつについても、何も書き残していない¹⁰⁾。ラーマ四世はもっぱらタイに渡来する西洋の使節に自国の歴史を紹介していたことになる。

先のラーマ四世の何気ない文章の中に、王はシャムの歴史がアユタヤの王朝から始まると考えていたことがわかるが、スコタイ王朝については言及がない。バウリングの文章でも、スコタイはシャムの北方の国と紹介されていたと推測される。王朝史を著すのは王家の人々や宮廷学者であったが、著す契機にこうした西洋人の渡来があり、ヨーロッパ勢力の進出に直面して、自分の統治する国家と王家の歴史が強く意識されていた。

その後、ラームカムヘーン王碑文は西洋人による解説が進み、ドイツ人アドルフ・バスティアン（Adolf Bastian）がラームカムヘーン王碑文を英訳して1862年に *Journal of the Royal Asiatic Society of Bengal* に紹介している。また、フランス人ペール・シュミット（Pere Schmitt）がフランス語に訳して1884年に紹介すると、このフランス語訳はあちこちに転載されていった。20世紀に入ると、ブラッドレー（C. B. Bradley）が1909年に、そしてフランスの考古学者セデス（Gorge Coedès）が1919年にサイアム・ソサエティーのジャーナルで全文の解説を発表している。

3. スコータイはタイ伝統文化の淵源

不思議なことに、タイ国内でラームカムヘーン王碑文が紹介されるのはもっと遅かった。バウリングに紹介されてから半世紀たったころであった。ラーマ四世の孫にあたるワチラーウット皇太子（後のラーマ六世）が、1907年1月よりスコータイ、カンペンペット、サワンカローク、ピサヌロークを2か月かけて調査旅行し、翌年に調査旅行記『プラルワン紀行』を出版した。旅行記は幾度か重版されているが、初版の巻末にラームカムヘーン王碑文第一面が現代文字に翻字されて紹介されたのが、タイ国内で紹介された最初であろう。再版では全四面のラームカムヘーン王碑文が紹介された。つまり、碑文はヨーロッパ人が到来した19世紀初めに、将来国王となる王子によって発見され、ヨーロッパ人の間で紹介されてきた。そしてまた、将来国王となる王子によって、タイのナショナリズムが唱道される直前に紹介されていたことになる。

『プラルワン紀行』の中でワチラーウット皇太子は、「本書がもうひとつの効果をもたらすことを期待している。それはタイ人が次のような認識を抱くようになることである。すなわち、我がタイ民族は「新しい民族」ではなく、「野蛮人」英語でいうところの”アンシビライズ”でもない。我がタイ民族は大いに進歩発達していたのである。だから現代において、他国と比較してどうであるとか言うまえに、われわれ自身の祖先に対して、とてもかなわないと内心恥ずべきである。スコータイ時代の腕前や技術、人の努力が現代人よりいかに優れていたことか、本書を読めば少なからず感銘をうけ、想像したりすることができるであろう。（後略）¹¹⁾」と序文のなかで述べている。ここでいう「新しい民族」とは、19世紀後半から20世紀初めにかけて、タイへの流入激しい華僑を指した表現であろう。大勢の華僑を迎えて、彼らよりも古くからこの地に住み、歴史をもつという、華僑への民族的反発、かつ西洋人には「アンシビライズ」とは呼ばれたくない自尊心、華僑や西洋人を意識して、古い歴史と伝統ある文化をもつ民族であることを主張して、ワチラーウット皇太子は国民に自尊心と誇りを持つように訴えていた。ワチラーウット皇太子は文中「タイ人」「タイ民族」という表現を用い、「シャム」という語は用いていない。

皇太子は1909年に再度スコータイ地方を訪問し、スコータイの北60キロにあるスコータイと双子都市の一方であったシーサッチャナーライで、巨大な仏像の顔と手と足を発掘し、その美しさにうたれて修復を命じ、修復された仏像に「プラルワン・ローチャナリッティ・シーインタラーティット・タンモーパート・マハーワチラーウット・ラーチャブーチャニヤボピット」と命名している。スコータイ王朝誕生にかかわったとする伝説の英雄プラルワンとスコータイ

初代の王シーインタラーティット、そしてワチラーウット皇太子自身を合体させた意味の名称である。皇太子がスコタイ王朝の英雄と精神的に合体したという意識である。皇太子は1912年にラーマ六世として即位し、1920年に逝去すると、王の遺骨はナコンパトムにあるこの仏像の基壇に納められたという¹²⁾。ラーマ六世はスコタイ王朝の伝説をもとに三つの戯曲を執筆している。ひとつは「地下のクメール人」、1917年には「プラルワン」、そしてもうひとつのオペラ調「プラルワン」は1920年の死の直前に執筆し、1924年に出版されている。ラーマ六世の、ラームカムヘーン王碑文の内容について言及する著作は見いだせないが、スコタイ王朝誕生にまつわる伝説のなかから、クメール王朝の羈絆を断ちスコタイ王朝成立に導く文化英雄「プラルワン」を引き出して、古い歴史と文化もつ国家というイメージをつくりだした。このラーマ六世の戯曲「プラルワン」は、王の死後約30年たって、芸術局が国立劇場で週末の金・土・日曜日に数週間続けて上演し、その後は国立舞踊学校生徒が習うスタンダード・ナンバーになっているという。また、「プラルワン」は国語教科書にも採用されて、架空の人物でありながら、独立不羈を示すタイの文化英雄として、タイの古典風芸術、古典風文芸の分野で定着させていた。結局、ラーマ六世はスコタイ時代をタイの古典文化の源として定位し、古典風の芸術を生み出して精神文化の生成と高揚をはかっていた。ラーマ六世の民族主義はこのスコタイ王朝を原点にするものであろう。

4. 「シャム=暹=スコタイ」説と「タイ」

王立シャム学士院院長を務めていたチュラーロンコーン王の王弟ダムロン親王は、カンボジアでクメール語碑文を解読していたフランス人考古学者セデスを招聘して、タイ国内で出土した碑文の解読を依頼した。セデスはラームカムヘーン王碑文を完全解読して、スコタイ時代の碑文を集めた『シャム碑文集第一集 スコタイ碑文集』を1924年にバンコクで出版した。一方、ダムロン親王は同年6月28日より4回にわたって、チュラーロンコーン大学でシャム歴史の講義を行っていた。その講義録『シャム王朝史講義録』¹³⁾が大学の月報に連載され、1947年に一巻本となって出版されている。ダムロン親王は、学者としての立場から、従来の王朝史とは違う、近年の研究成果を盛り込んだシャムの歴史である、と述べている。その内容は、タイ族が支配する以前のシャム、タイ族のシャム国支配、スコタイ王朝（発展期・衰退期）、アユタヤ王朝（成立期・発展期・戦争期）、という構成になっている。従来の王朝史にはないタイ族がこの地を支配する以前の歴史を説いて、インドと中国の間にあったタイ民族という歴史認識を示した。またスコタイ王朝をアユタヤに先立つ王朝として位置づけし、シャムの歴

史に定立させたのが本書の特長となっている。全体の四分の三がアユタヤ王朝にさかれているが、ラタナコーシン王朝はない。親王が述べている通り、確かに当時の新しい研究成果を盛り込んだ斬新な内容であり、それが当時の読者をひきつけた。

ダムロン親王は、シャムの地にクメール、ラワ、モンの先住民が住み、インド人が渡来して宗教を伝えて国家を形成していたころ、タイ族はまだ中国南部に居住していたと説く。親王が愛読していた『三国志演義』を引用して、諸葛孔明が南の蛮族の首領孟獲を討伐した話は、タイ族への討伐に他ならないとする。それ故にタイ族は漢族の支配を嫌って移動を始め、残ったタイ族が南詔王国を建設したと解釈する。元朝のフビライハンの遠征で、残ったタイ族も南下移住を始め、北部タイにタイ族の勢力が横溢し、南のクメール族の支配を排除して独立したのが、スコタイ王朝であった、つまり、北方の漢民族の圧迫を受けて、タイ族は南中国から今のインドシナ半島へ移動をはじめたとする。スコタイ王朝の初代王シーインタラーティットが独立したころ、クメール族は現在のロップブリーに「ラヴォー」と呼ぶ国家を形成していて、これが中国の史書にいう「羅斛」国であり、北部のスコタイを「暹」国とよんだ、つまり「シャム」の音訳である、というペリオ以来の説を採る¹⁴⁾。

だから、「シャム国」(Prathet Sayam)という国名はこの時代に生まれたのだが、これは異邦人が呼ぶ国名であり、タイ人自身は自分の国を「タイ国」(Muang Thai)とか「スコタイ国」(Krung Sukhothai)と呼んで、「シャム国」とは決して呼ばなかったと主張する。「シャム」とはサンスクリット語で赤銅色あるいは黄金の意味を持ち、赤銅色とすれば民族の肌の色をいい、タイ族は肌が先住民よりも白いから、むしろ「シャム」は「黄金」を意味し、アショーカ王が布教僧を派遣したスヴァルナ・ブーミ「黄金の土地」とちょうど意味が一致する¹⁵⁾、と解釈した。つまり、ダムロン親王は、「シャム」は国名であり、「タイ」は民族名である、と理解した。そして、「シャム」の音訳が「暹」であり、「羅斛」の北にあった「暹」が「スコタイ」であり、「羅斛」が「暹」と合併して中国で「暹羅」と呼ばれるようになったのと、「スコタイ」が「アユタヤ」に併呑された歴史事実とまったく一致すると考えた。ここに「シャム」がスコタイ王朝をも含む「王国」という史観が生まれた。そしてこの史観がいまもタイの歴史学界を支配している。一方、「タイ」と呼ぶ民族名が歴史に登場するのは、ラームカムヘーン王碑文の第4面の支配地域をあげたなかの呼称においてであるが、ピリヤはラームカムヘーン王碑文の「タイ」という語句を偽作説の根拠にしている。すなわちスコタイ時代のほかの碑文では「スコタイ国」(Muang Sukhothai)あるいは「シーサッチャナーライ・スコタイ国」(Muang Sisatchanarai-Sukhothai)という国名で呼ば

れて、「タイ」は「シャム」を指し、この時代にはスコータイを含んでいなかった¹⁶⁾、と主張する。「シャム」はスコータイを含まないことになり、「暹」=「スコータイ」説を否定することになる。

ダムロン親王はまた、スコータイ王朝の発展期をラームカムヘーン王碑文の内容に沿って解釈して、周辺タイ族を糾合した「ラームカムヘーン王は統治者として軍人として卓越した王¹⁷⁾」として高く評価している。さらに、王はナコーンシータンマラートから高僧を招いて、マハーニカーイ派を誕生させたと、国王と仏教との関係も説く。

5. スコータイ王朝の温情主義と同化力

ダムロン親王はその後1927年に『シャム国の伝統的統治形態』という題目で講演している。講演録はその後何回も出版されている。「独立を好むタイ族は中国の配下に置かれるのをいさぎよしとせず、故郷を捨てて新天地を求めて西方へ、南方に移住した¹⁸⁾」とし、独立心の強さを強調しながら、ここでも中国の圧力を起因とする、タイ族の移住を説明している。そして本書でも、「スコータイは1250年頃にタイ族の勢力下に入った、シャムの最初の首都¹⁹⁾」とし、スコータイ王朝がシャム王国の始まりとしている。こうして、スコータイ、アユタヤ、ラタナコーシン現王朝と、地理的に北から南へ順に進出し、北の古い王朝が倒れて南に新しい王朝が興るという、時系列でも整合性を持たせた一系の歴史を描いてみせる。スコータイ王朝を立てた民族が、果たしてタイの中央部を占める現在のシャム系の民族だったのか、あるいはラーオ系の民族であったのか、言語の系統から現代の学界ではまだ議論が続いているところであるが。

スコータイ王朝以来約700年間、シャムの独立を維持しながら統治できたタイ族の徳性として、ダムロン親王はわざわざ英語で表現して、Love of National Independence, Toleration, and Power of Assimilation をあげ、その理由を次のように説明する²⁰⁾。

1. 独立心 中国の支配下にあるのを嫌って民族移動。
2. 寛容性 ラームカムヘーン王碑文では、異民族であれ異教徒であれ、受け容れて慈しんだ。
3. 同化力 ラームカムヘーン王がクメール文字からタイ文字を発明。タイ文字とクメール文字を両用し古代クメールの習慣を受容。現代の華僑を同化。

過去において先住民族を同化吸収したラームカムヘーン王時代の寛容性と同化力は、華僑を同化吸収している現代にも生かされている伝統であると説く。また、スコータイ朝は Pater-

nal Government で成り立ち、古代クメールの Autocratic Government ではなかったとする。その根拠は、家父を「ポー・クルワ」Pho-Khrua、村長を「ポー・バーン」Pho-Ban、小国の長を「ポー・ムアン」Pho-Muang と呼ぶように、国王を「ポー・クン」Pho-Khun と呼び、父親を意味する「ポー」Pho という語が生かされて、「タイの統治方法は父親が子供を保護するがごとくである²¹⁾」という家父長的温情主義が基本であったと、ラームカムヘーン王碑文の表現から説明する。ダムロン親王はまた、しかしこの温情主義の統治はラームカムヘーン王の治世までで、ラームカムヘーン王以降は古代クメールの神聖王とラームカムヘーン王の倫理王の双方の良い点を取り入れたものの、スコタイ王朝は衰退してアユタヤ王朝に吸収され、古代クメールの神聖王の影響が大きくなったともいう。現代タイの民族精神や王権思想はラームカムヘーン王碑文に発し、断続的に今に伝えられた伝統であると説く。

国王を慈父とするような王権思想が、アユタヤ王朝と現王朝初めまで続く国王を神の権化とする神王思想の時代を経て、ふたたび現代に蘇ったとすれば、19世紀中期に登場するラームカムヘーン王碑の存在がなければ証明できなかったということになる。いいかえれば、かつての Paternal Government が現代に継承できるのは、ラームカムヘーン王碑の刻文があればこそ可能になるということである。近代になって、碑文のおかげでようやくラームカムヘーン王の治世を理想とする伝統の政治思想が甦ったことを意味する。もしラームカムヘーン王碑偽作説にたてば、国王を慈父にみたてる温情主義の政治は、歴史的なものとは言えなくなり、固有でも伝統でもなかったかもしれない、むしろラーマ四世の創作であり、創られた伝統ということになる。

この家父長的温情主義を現代政治に実践しようとしたのが、クーデターにより1958年に政権を握ったサリット・タナラット将軍であった。サリットは自らが実践する「ポー・クン」として登場し、さまざまな政治的パフォーマンスを国民の前で披露していた²²⁾。ラームカムヘーン王碑文に「ポー・クン」で語られた温情主義は、いまや現代の政治を動かすタイのイデオロギーのひとつになっている。

6. タイ族”5000年”の民族史

ダムロン親王の講演から一年後の1928年、クン・ウィチットラマートラーは『ラック・タイ (Lak Thai)』(タイ族の基盤)という書²³⁾を著して、王立学士院院長ダムロン親王から王立学士院賞を受賞した。第一部がタイ族の歴史、第二部がバラモン教、仏教を含む宗教、第三部が国王という構成になっている。「民族・宗教・国王」の三要素を「ラック・タイ」と呼ば

れるようになったのは本書の題名による。執筆の意図を著者は「まえがき」で、タイ人が民族に誇りを持ち、ますます宗教に帰依し、国王に忠誠を尽くすことであるという。著者はダムロン親王の説を受けて、さらにタイ民族を強調し、民族移動のながい歴史を説く。本書が説くタイ族の歴史は、タイ族がほかの黄色人種と同様にアルタイ山脈から発して、漢民族より1000年はやい約5000年前に黄河流域に達して、その後揚子江流域に至る、という壮大さである。その間、中国にあった「パー」や「ルン」などタイ族の都が、中国の神話に登場する王朝に滅ぼされていったなどと延々と説く。

中国の歴史はタイ語訳されていた『列国史演義』『西漢演義』や『三国志演義』などの中国の歴史小説から引用している²⁴⁾。例えば、後漢のころ、雲南の大理にあった哀牢王国はタイ語音の「アイ・ラーオ」と解釈して、タイ族の国家であったとする。また、『三国志演義』に登場する、蜀の宰相諸葛孔明が滅ぼした南の蛮王孟獲はタイ族の王であった、というダムロン親王の説を引用する。雲南省の大理を都とする南詔王国をタイ族の国家(A.D. 618-757)として時代設定し、雲南の大理府はタイ族の都ノーンサーであったといい、南詔王国の王、細奴羅はクン・ルワン王、皮羅閣はラーオ族の伝説上の始祖クン・ボーロム(またはクン・ブーホム)に同定している。そしてクン・ボーロムが到達したテーン国は滇国であったという。時代も地域も超越して、少しでも似た音をさがして短絡する、語呂合わせのような論が展開され、タイ族のもつ神話伝説を援用して、中国史のなかからタイ族らしきものを歴史事実として読みとっていこうとする。そして、チエンセーンを都とするヨーノック王国時代(757-1107)、ラーンナー王国時代(1107-1187)が続き、シャム王国のスコタイ時代(1257-1350)となって、本書でもダムロン親王と同じくスコタイ王朝をシャム王国の一時代とみなし、アユタヤ王朝、現在のラタナコーシン王朝と連続する「タイ族のシャム王国」という一系の国家として時代区分する。こうした歴史認識は、ラーンナー王国が20世紀初頭以降にラタナコーシン王朝に併合されていったのと同じく、スコタイ王国もかつて14世紀中期にアユタヤ王国と並立し、その後、15世紀中期にアユタヤ王朝に併呑吸収された歴史事実は無視している。

この民族史では、現ラタナコーシン王朝については、150ページにわたる歴史記述のうちのわずか4ページしか割いていないのに比し、歴史以前のタイ民族史には116ページを割いて、タイ民族の古さを強調している。民族史のほとんどを占める前史は、タイ語に翻訳紹介された中国の歴史小説から、つねにタイ民族が漢民族よりも先行し、先に黄河流域に達し、先に揚子江に達していた先駆者として位置づけ、漢民族は後から到達した後発組であるとする。漢族より先まわりして民族移動するタイ族の存在、漢族に抵抗する南方の諸国や王を拾い出し、タイ族

の国家、タイ族の国王として読み取ろうとする読み替えには、タイ民族の漢民族に劣らぬ歴史の悠久性を強調する意図があり、中国の漢族に対抗する民族としてのタイ族の偉大さを想起させる内容になっている。漢民族の覇権膨張、圧倒的圧力に対する周辺民族の反発と対抗意識を感じさせるが、中国が4000年の歴史を誇るならタイ族の歴史としてはシャム王国を含む5000年の王朝史を記述して、連綿たる悠久の歴史を描いたのが、受賞した理由のひとつであったであろうし、今まで版を重ねてきた理由であろう。また、本書を『ラック・シャム』でなく『ラック・タイ』と称したのは、民族史を描いたからであったのだろう。結局、本書の説く内容が誇張した民族史であっても、現代史の中に当てはめれば、華僑は新参者で、タイにおいてはタイ人が優位に立つべきであるという主張であり²⁵⁾、華僑に対抗するタイの国家イデオロギーを構築するための著作であった。

本書の歴史の章をしめくくる終りの4ページで略述されているラタナコーシン王朝は、ベトナムの王朝を支援し、ビルマを破り、西洋列強と条約を結んで、第一次世界大戦に参戦したという対外関係が語られている。今や西洋列強の植民地となったビルマ、ベトナムに対して、隣国より優れた立場、西洋列強と共に並ぶ対等意識、大国に成長したタイ族の国家という、他国と比較する視座、歴史認識が読みとれる。

タイ族の歴史の古さを誇り、この地での優位性を主張する自意識と威信の言説は、ピブーンソンクラーム（以下ピブーンと略称）政権が1939年6月24日に発布した「ラッタニヨム」（国家信条）の第一号において、はじめて「シャム」という国名を「タイ」に変更させ²⁶⁾、華僑のタイ国内での政治活動を取り締まり、華僑学校を全部廃校に追いやった華僑弾圧政策に²⁷⁾、大きな支えになったであろうし、ピブーンが唱えたナショナリズム「大タイ主義」という自尊心にも影響を与えずにはおかなかったであろう。ピブーンが「ラッタニヨム」第三号で発布したところの「タイ」の定義は、ラーオ族であろうとムスリムであろうとタイ国内に住んでいる者は「タイ人」と呼ぶこととした。国民国家として「国」と「民」を合一させる国名に「タイ」を選び、「国民」として、民族の出自、宗教を問わない「タイ人」という呼称に統一させたと解釈される。タイに住む華僑に対しては、国籍を取得し易くして、タイ国籍に変えることを奨励したという²⁸⁾。ピブーンの華僑弾圧政策は華僑排斥ではなく、同化政策である。ピブーンは同化した華僑を「新タイ人」と呼び、「旧タイ人」と一緒になって国家建設に励むよう演説している。ダムロン親王があげたタイ族のもつ伝統的精神「寛容性」と「同化力」は、ピブーン政権の政治の場で、華僑を対象に具体化され実践されていたことになる。

タイ族5000年という民族移動史は根拠がないと、さすがに今では否定されている。タイの中

学校用歴史教科書では、中国の史書、タイの伝説、言語の系統、地理学的・考古学的根拠から、タイ族の原郷を中国の広東・広西の両省とする説を取り上げている²⁹⁾。タイ族はだいたい河川の近くの水の豊富な農耕に適した平地を好み、砂漠や山岳地帯に住むはずはないのだと解釈する。また南詔王国もパイ族やイ族の国家という最近の学説を支持し、タイ族の国家という説を退けている。さらに『ラック・タイ』で示されたタイ族の大陸移動説を否定しうえて、それに変わるタイ民族の起源論として、タイの北部、ビルマのシャン州、メコン川のルアンプラバーン、ベトナムのトンキン地方を支配したというシンハナワット王子（Nakhaphan Singhanawat Nakhon）の伝説を登場させている。王子の末裔であるプロム王（Phrachao Phrom）が6世紀ころクロム族（Krom または Khom、モン・クメール族の祖先）を撃退して北タイ地方を支配した、といい、それからチャオプラヤー川の流域に進出して行った、と説明する³⁰⁾。そして12世紀にタイ族はいくつもの部派に分かれて勢力を拡大していったとして歴史につなぐ。連綿と王統が続くシンハナワット王子の伝説が世に紹介されたのは、チエンマイの郷土史家によってであり、バンコクで知られるようになったのは最近である。つまり、この伝説は北タイのユワン族の伝承であって、チャオプラヤー川流域に住むタイ族のものではない。ユワン族は北タイの住民を指し、タイ中央部のタイ族と同じタイ族であるという広い見地からいえば、タイ族の起源説話としても不合理ではない。歴史をより古くさかのぼり、民族の起源を説くためには、タイ国内のタイ系民族の伝説を援用して、スクラップアンドビルドの歴史構築が続けられている。

7. 革命政府とラームカムヘーン王碑文

1932年6月24日にルワン・ピブーンソクラームやルワン・プラディットマヌータムらによる立憲君主革命が成功し、1933年6月20日には革命の元勲プラヤー・パホンポンパユハセーナーが政権を掌握した。革命政府のブレーンとして芸術局長を務めていたルワン・ウィチットワータカーンは、1934年に碑文を解説した『ラームカムヘーン王碑文』³¹⁾という小冊子を著している。当時の首相プラヤー・パホンポンパユハセーナーが「まえがき」を書き、「タイ族が外国人勢力の羈絆を断ち、民族のきずなを固くした時代。ラームカムヘーン王が成し遂げられたように、わがタイの国家の安定と名誉を一致協力して保持しよう」と述べている。またルワン・ウィチットワータカーンも、ラームカムヘーン王をタイ民族最初の「大王」と讃え、強固なシャム国を建設したが、王の治世が去ると誰ひとりとしてタイの固有性を維持しようとせず、古代クメール式にもどった、とダムロン親王の説を敷衍する。ラームカムヘーン王を民族

英雄として讃え、独立と民族統一を果たしたという局面が強調されているのは、反革命の動きを封じた後に発足した革命政府にとって、国家統合が最重要課題であり、国家統合の英雄としての側面からラームカムヘーン王が起用されていたのであろう。ラームカムヘーン王の治世を理想とする時代を現代に蘇えらせて、安定政権を築こうとする努力がこうした著述にもあらわれている。ルワン・ウィチットワータカーンは後にサリット政権のブレーンとなり、サリットに「ポーケン」の思想を伝授している。

1938年12月から1944年8月まで政権を掌握し、戦後は1948年4月に再び政権の座についていたピブーンは、1955年7月14日の自分の誕生日に総理府から『スコータイ史第一巻』³²⁾を出版させ配布している。300ページ近い大判に良質紙を用い、1ページ大の写真40枚を挿入した、当時としては立派な装丁の『スコータイ史第一巻』は、ラーマ六世やダムロン親王らのスコータイに関する著作の中から、スコータイ史にかかわる部分を抜粋して編集され、とくに新しい内容をもつものではなかったが、ピブーンの政治的意図を十分にうかがわせるものであった。ピブーンは「まえがき」で、「スコータイの時代はタイ民族が定住地を見いだした時代。物質的・精神的に発展した証拠として、碑文をはじめて持った時代」と規定し、「国家の栄枯盛衰に責任感を高揚させるため、我がタイ国がかつて光輝ある歴史を有したことを学んで、国民の間で理解を深める時期にきたという気がする³³⁾。」と述べ、そのために、スコータイ時代歴史編纂小委員会を発足させている。そして本書の出版は価値ある記念碑のようなものだという。スコータイ王朝はタイ史のなかの理想的な王朝であり、国家開発を推進するシンボルとして、国民に広く周知させることを意図していた。この時期、1954年に東南アジア条約機構(SEATO)が発足し、1955年には戦時中に日本がタイで用いた特別円の問題が解決して協定が結ばれている。タイが開発独裁へ向かう幕開けの時に、スコータイ王朝は、タイの精神的支柱として登場していた。1957年にピブーン政権はサリット・タナラット将軍によって打倒されるが、サリットはスコータイ王朝のラームカムヘーン王の温情主義の局面を学びとったことは、すでにみたところである。

8. 政治的伝統を創りだすラームカムヘーン王碑

タイを代表する国際的にも有名な政治家であり外交官であって、かつ学者として著作活動が続けていた二人の人物が、1965年にあいついでラームカムヘーン王碑文を紹介している。ながらくピブーン政権の外交顧問を務め、国連総会の議長を務めたことがあるワンワイタヤコーン親王は、セデスによるラームカムヘーン王碑文のフランス語訳と並べて英訳して紹介してい

る³⁴⁾。一方、かつて戦時中のアメリカ駐在公使の身分から抗日組織自由タイを率いたことがあり、戦後は二度も首相に選出されたセーニー・プラーモートは、1965年に私立学校協会にてラームカムヘーン王碑文について講演し、その講演録が後に出版されている³⁵⁾。セーニー・プラーモートによれば、講演する契機になったのは、同年に国王がラームカムヘーン王碑のレプリカをジュネーブにある国際法学者団体に寄贈されることになり、まずタイの法律家協会に下賜されたことにはじまるという。それに因んでセーニー・プラーモートはテレビ出演したが、自分の話す時間が少なくなってしまう、あらためて講演の機会をもったという³⁶⁾。また、ラームカムヘーン王碑のレプリカは、それ以前にアメリカでの法律家の国際会議にタイの法律家協会の代表が持って行って展示し、関心と呼んだともいう。するとワンワイタヤコーン親王によるラームカムヘーン王碑文の英語訳は、このレプリカにつけられたのであろうか。この時期のレプリカ製作は、海外向けにタイ歴史文化の高さを誇示するためであり、国内においては教育の場における歴史知識の普及に役立てるものであった。

イギリスで法学を学んだ法律家セーニーは、ラームカムヘーン王の碑文の内容から、その政治的メッセージを分析して、タイで最初の憲法と呼ぶべき内容のものであり、同時代の13世紀のイギリスのマグナ・カルタに匹敵する内容をもつと高く評価する³⁷⁾。ただし、マグナ・カルタはジョン王が貴族たちに強制されて承認した勅許状であるのに対し、碑文では国王が国民を愛し慈しんで、自ら進んで自由を与えている³⁸⁾、と解釈して、このような内容の政治的文書は世界のどこをさがしても、いまだかつて出会ったことがないと、専門の立場からその特異性をあげている。セーニーはさらに、インドシナ半島に残る碑文はたいてい寺院の建立とか寄進を顕彰する碑で、それも、王様が食べていた魚を捨てる泳ぎ出したというような、とかく奇跡を起こす話を刻文にしているが、ラームカムヘーン王碑文は王家の系譜を語り、国家を讃え、国民を褒めた、政治と制度を語る稀な碑文である³⁹⁾、と碑文としてかなり特異な内容に疑念を呈する。また、セーニーはラームカムヘーン王碑文の内容に、自由・平等・博愛という、極めて近代的な精神がみなぎっているのに感動を覚えながら、しかし、13世紀にこのような碑文がありえるのだろうか、実証を重んじ法理を探究する法学者としての立場から、判断に苦しんでいる。また、ラームカムヘーン王が王宮の門に鈴をつけて、苦情や訴えに訪れる国民の声を聞いたという話に、自宅でベルを押して使用人を呼んで用事を言いつけている自分の立場で考えても、これでは国王でなくてベル・ボーイではないか⁴⁰⁾、とセーニーは首をかしげる。1980年代末に偽作説の論争が起こる四半世紀も前に、碑文の伝える政治的手法に、不自然さを読み取っていたタイの政治エリートがすでにいた。

ところで、ラーマ四世モンクット王は19世紀中葉の絶対王政のもとで、王宮の門に「審判太鼓」なるものをぶら下げ、国民の呼び出しにこたえて、王自らが訴訟事件の審判を下す直訴「ディーカー」(Dika)の実施を布告していた。

この「ディーカー」の制度がラームカムヘーン王以来途絶えて、ラーマ四世が復活させていたとすれば、ラーマ四世はラームカムヘーン王碑文を確実に解読していたといえる。ラーマ四世はラームカムヘーン王碑を発見したそのひとである。王はまた、ピリヤによればラームカムヘーン王碑を創作したひととされている国王である。王が27年間の僧籍にいた間に、西洋人から西洋思想を学んでいたという推測も可能である。いずれにせよ、ラーマ四世は約600年前の伝統を復活させたか、あるいは新しい伝統を生み出そうとしていたのである。ラーマ四世は治世中(1851-1868)に「ディーカー」に関する布告を5回も発布している⁴¹⁾。順に要約すると次のようになる。

1. 「ディーカーに関する布告」(1853/4)

スッタイサワン宮殿(現プッタイサワン宮殿)において月4回実施する。

難儀、困苦、争い事を訴えでることができる。冤罪は無罪放免とするし、処罰の要する者は禁固刑に処す。

2. 「ディーカーに関する布告」(1855/6)

月4回の実施が困難となり、待たせることが多いので、兄弟親戚・友人知己が役人をしている者は役人を通じて宮殿のどこでもいつでも直訴できる。直訴の内容は事実を正直に正確な綴字で野卑な言葉を避けて書面にせよ。

3. 「ディーカー受付時間に関する布告」(1856/7)

バンコクにおいては省法廷に訴え、地方では地方国主や事務当局に訴えよ。地方国主や地方官が忌避する場合は、彼らを中央省庁に起訴せよ。中央省庁が公正に裁かない場合、受けつけない場合は直訴せよ。事実を簡潔に品良く述べよ。王宮書記官に代筆を依頼してもよい。知り合いの王宮役人に依頼して直訴してもよい。そうした知己がない場合、毎月陰暦の7日、14日に国王がスッタイサワン宮殿にお出ましになるから、太鼓が鳴った時に参上せよ。王がお出まし不可能な場合、マヘースワンシワウィラート王子が同宮殿で国民の直訴を受ける。

4. 「ディーカーに関する布告」(1858年4月6日)

ブラチョーム王[ラーマ四世]が常にすべての国民を慈しんでおられるのは、バンコク内外の役人も国民も知るところである。争い事を訴えたい者は一枚一枚紙に簡

潔に事実を述べ、いつでもどこでも王宮の役人に渡せ。それができない者は、月4回の「仏の日」に待機せよ。王のお出ましが無い時はマヘスワンウィラート王子が代わって受けつける。不当な手数料を要求する王宮役人は処罰される。王に直訴できた者には2サルン（半バーツ）を紙代として下賜する。

5. 「ディーカーと流言飛語に関する布告」（発布年不詳）

最近流言飛語が人心をまどわし、それが直訴にまで反映されて、あそこの税をとりたてよとか、あの人物を逮捕せよとか、あの人物を処罰せよとか、とかく虚偽が人を惑わしている。そこで、人を驚かすどんな話を聞いたか、事実かどうか書面で尋ねよ。国王は事実を明らかにし、疑念を晴らしてくれるであろう。とくに重要な事からは布告によって周知させる。そうした話をもたらした者には褒美を贈る。上奏する書式を次のように定める。

最初の布告の「難儀、困苦、争い事を訴えでることが出来る」という表現は、語彙は同じではないものの、ラームカムヘーン王碑文の表現に酷似している。最初は簡便に何の規制もせず始めたが、まもなく国王ひとりでは対応できなくなり、役人たちが取り次ぐようになり、書面で受けつけ、代理に王子が訴えを聞くようになる。そして地方でも受けつけるが、次第に裁判制度の体裁になっていく。しかし、乱用悪用が激しくなり、書式を定めて受けつけるようになる。月4回の「仏の日」は、ラームカムヘーン王碑文ではラームカムヘーン王が国民の前で政事を執り行う期日になっていた。

こうした繁雑ないきさつを知ってか、あるいは王権を強化し国王の威厳を回復して、絶対王政を高揚するためか、ラーマ五世チュラーロンコーン王はこの「ディーカー」の制度を継承していない。20世紀に入って初等裁判所と高等裁判所が設立され、その判決に不服である場合は、国王の代理をつとめる「ディーカー」委員に控訴できる制度になっていた⁴²⁾。現代は初等、高等、最高の3階級の裁判所があるが、国王に直訴する「ディーカー」は、時としてよみがえり、可能となる。ベルや太鼓こそつるしてはいないが、4000～5000バーツほど上納すれば、王宮において親しく国王に拝謁できたという⁴³⁾。また、1973年10月の憲法要求運動において、学生や知識人と軍部が衝突したいわゆる「学生革命」は、学生たちの代表が王宮におもむいて直接国王に訴えたのに応じて、国王が内閣総辞職を求めたので成功したといわれている⁴⁴⁾。ラームカムヘーン王碑文に語られた国王に直訴する制度は、タイの近代化のなかに再現され、伝統として現代に生きている。

ラームカムヘーン王碑レプリカによる普及の前、タンマサート大学が教養学部を1962年に新

設すると、学部校舎の二階から七階までの広い壁面を利用して、ラームカムヘーン王碑文が大きな文字で模写された。また高校卒業生なら誰でも入学できるオープン・ユニバーシティーとして1971年に新設された国立大学は、ラームカムヘーン大学と命名され、キョンパスの中央にはラームカムヘーン王の像が安置されている。タイ文字を発明した王はタイの学問の始祖、碑文はタイの文化文明の起源とされるようになった。さらに1980年に創設された放送大学は、スコタイ・タンマティラート大学と命名された。「タンマティラート」とは「仏法を政治に体现する国王」をいう。スコタイの王は仏法の倫理を実践してきた王であり、善悪是非に判断をくだす王者である。そして、1283年にタイ文字が誕生したとして、700周年にあたる1983年に、チュラーロンコーン大学はラームカムヘーン王碑のレプリカを大量に製作し、世界のタイ語を教授している大学、タイを研究している研究所に寄贈した。チュラーロンコーン大学はタイの伝統的学問文化を継承し研究する機関を自負している。タイ文部省芸術局も同じ時期にラームカムヘーン王とスコタイに関する多くの出版物を発行し、ラームカムヘーン王の功績を讃え、この時代をタイの理想郷と描き出している。そして中学校の歴史教科書は、ラームカムヘーン王を国家英雄と讃え、スコタイ王朝を異民族からの自立、国家建設と発展に尽くした祖先への誇りをもたせるべく教えられている。

9. 結 び

ラームカムヘーン王碑が世に紹介されたのは、19世紀中期ヨーロッパ諸国との通商航海条約を結ぶ、ヨーロッパからの衝撃をうけて、タイが新しい事態に対処しなければならないときであった。ラームカムヘーン王碑の刻文が国王と国民の慈愛に満ちた家父長的温情主義、自由な交易と平等な社会を語り、異民族の同化と異民族からの独立不羈の民族性を示して、過去のタイに、ヨーロッパの文明国家に勝るとも決して劣らない、文化の高い品位ある国家社会の存在を誇示するには、まことに時宜を得た登場であった。その半世紀後に迎えた大量の華僑流入に際しても、この地に古い歴史を持つ民族、高い文化と伝統を持ち、かつ包容力を持ち同化を促す、タイの誇りと威信を示す民族主義の根拠を示すのにも、ラームカムヘーン王碑文は十分に応える内容をもっていた。そして、立憲君主革命においても国家統合の範たりえなし、開発独裁の時代には発展のモデルとなり、温情主義が強引な独裁政治を影でささえていた。国王に直訴するディーカーは、ときの政治の動きを転換する絶大な力を発揮するのを、われわれは見てきた。近現代のタイにおいて、ラームカムヘーン王碑文が語る内容は、時代の異なる要請に応じて、それぞれ異なる局面を伝えて貢献してきた。そしてそれらは王国のかけがえのない思想と

なり、国家と国民をつなぐイデオロギーの一部となって、タイの国家精神の拠り所になっている。

ラームカムヘーン王碑文で語られるスコタイ王朝が、シャム王国の最初の王朝と位置づけられ、暹羅の「暹」がスコタイではなく、アユタヤを指し⁴⁵⁾、あるいはスパンブリーを指そうが⁴⁶⁾、スコタイが「シャム」を指し「暹」とする、という主張が、タイではいまだに通説となっているのも、ラームカムヘーン王碑の存在によるところ大なるものがある。ラームカムヘーン王碑がスコタイ王朝の始まりを語り、スコタイ王朝が現代の王朝につながるシャムの初代の王朝とするならば、「暹羅」の「暹」はシャムの理想的な王朝スコタイであってほしいのである。タイの保守主義者やロイヤリストの間で「タイ」という国名よりも「シャム」の方を好むのも、ラームカムヘーン王碑の刻文が現代タイの政治活動や文化活動、精神活動にいたる諸々のタイの伝統の起源となっているとするからであり、ラームカムヘーン王の碑文で始まる輝けるシャムの王朝の存在と無関係ではあるまい⁴⁷⁾。一方、「タイ」ということばは、「シャム」を含み「シャム」よりも歴史をはるかにさかのぼり、かつインドシナ半島から中国南部に分布して居住する民族が一致して用いる名称であり、民族の伝統を継承した盟主としての国家「タイ王国」がある。また、同化した民族を含む「国民国家」の国民としての「タイ人」がいる。そして「タイ」という呼称もまた、ラームカムヘーン王碑文のなかに用意されている。

だが、ラームカムヘーン王碑文が世に広く知られ、研究が深まれば深まるほど、碑文の言語や文字に特異性を見だし、歴史的事実や現場との矛盾が指摘され、果たして13世紀のタイにこのような比類なき理想的な国家が存在し得たであろうかと、実証を重んじる学者は疑問を投げかける。しかし、それにもまして、ラームカヘーン王碑の語る内容がタイの古代史を形成し、ひるがえってタイの近現代史を補強し、タイの王権と政治を強化するという二重三重の役割を果たし、さらにラームカヘーン王碑の銘文がタイ固有の良き伝統として現代を動かしているかぎり、もはやラームカムヘーン王碑が偽作であろうがなかろうが、その存在性が意味を持つのである。

【注】

- (1) Michael Vickery, "The Ramkhamhaeng Inscription : a Piltdown Skull of South-east Asian History ?" The Australian National University, Canberra, 3-6 July 1987.
- (2) Phiriya Krairuk, *Kansuksa choeng Prawattisat Sinlapa : Charuk Pho-khun Ram-*

khamhaeng, Khana Sinlapasat, Mahawitthayalai Thammasat.

- (3) Phiriya Krairuk, *Charuk Pho-khun Ramkhamhang : Kanwikhro choeng Prawat-tisat Sinlapa*, Amarin Printing Group, Bangkok, B. E. 2532 (1989) .
- (4) Phiriya Krairuk, " Silacharuk Pho-khun Ramkhamhaeng" , *Phasa lae Phasasat*, 8-1, 1989, Khana Sinlapasat, Mahawittayalai Thammasat.
- (5) *ibid.* , p. 11.
- (6) Sayam Samakhom nai Phraboromrachupatham, *Kham Aphiprai Ruang Silacharuk Sukhothai lak thi 1*, Amarin Printing Group, B. E. 2533 (1990) , p. 3.
- (7) この時期、偽作説を主張する学者に人的危害が加えられるという恐れ、偽作説が政治的に利用されれば王制にも影響が及ぶ恐れ、などが考えられ、カンラヤーニー内親王の発言はそうした社会的・政治的な影響を考慮した発言ともうけとめられる。実際にピリヤの著作や論文が例え学術上優れていても、ラームカムヘーン王碑が偽作で、こともあろうに、その偽作者がラーム四世であったとする説は、ピリヤがいかにラーム四世が天才的な能力をもつタイ史上最も誉れ高い国王という賛辞を送ろうとも、あるシンポジウムの席では厳しい非難の声が続出した。ピリヤはタイでも著名な貴族の出身で、11歳の時からイギリスで教育を受け、アメリカのハーバード大学で博士号を取得したタイが誇りとする美術史学者であり、タイ王室が支援する学術団体サイアム・ソサエティーの会長を務めている。ピリヤを良く知る筆者の友人の話では、普通のタイ人学者があのような内容を発表すれば、タイではとても生きてはおれないだろうということである。なお、ピリヤは当時、タンマサート大学教養学部の準教授であり、カンラヤーニーワッタナー内親王はおなじくタンマサート大学教養学部のフランス語の客員教授の立場におられる。

タイでの真偽論争については、三上直光の研究ノート「ラームカムヘーン王碑文の文字表記――偽作の可能性をめぐる――」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第22号, 1990, pp. 199-23に詳しい。三上は碑文文字と音韻の関係から、偽作説を退ける立場に立つ。だが、スコータイ碑文第二基（ワット・シーチュム碑）に関する1980年のセミナーでは、スコータイの碑文は通常母音符号 i を子音文字の上に、母音符号 u を子音文字の下につけるのに、母音符号を子音文字と同列に並べるラームカムヘーン王碑文の特異性を率直に認めている。

他に、スコータイ王朝の系譜に、ラームカムヘーン王碑文の記述を加えることにより、同じ時期に二つの王家を描かなければならなくなるという問題が生じる。他のスコータイ

碑文に登場する Phraya Khamhaeng Phraram、Ramrat という人物と、Pho-khun Ramkhamhaeng との関係はどうなるのか、また、たいていの学者が初代王 Si-Intharathit とスコータイ碑文第二基の Si-Intharabodintharathit と同一人物としているが、それなら何故呼称が違っているのかの説明はない。あいまいなままになっている。Kong Hosamut haeng Chat, *Silacharuk Sukhothai Lak thi 2 (Silacharuk Wat Sichum)*, Krom Sinlapakon, B. E. 2527 (1984). ラームカムヘーン王碑文がなぜこうした特異性をもつのか、またラームカムヘーン王碑文の表記法の合理性がなぜラームカムヘーン王碑文だけに終わってしまい、その後に継承されなかったのか、疑問は解消されない。

- (8) *Phraratchahatthalekha Phrabat somdet Phrachom klaochaoyuhua nai ngan chalong khrop 84 pi*, Mahamakutratchawitthayalai nai Phraboromrachupatham, B. E. 2521 (1978), p. 307.
- (9) Bowring, Sir John, *The Kingdom and People of Siam*, Vol. 1, Oxford University Press, Reprinted, 1973, p. 279.
- (10) 王が出家時の側近であった高僧が発見のいきさつを書き残しているだけである。それも表現があいまいであるために、ピリヤは偽作の根拠のひとつにしている。
- (11) Phra-Mongkut klaochaoyuhua, Phrabat-somdet, *Ruang Thiao muang Phra-Ruang*, Krom Sinlapakon, B. E. 2500 (1957), p. (9).
- (12) Montri Umavijani, *King Vajiravudh and Phra Ruang*, Siriporn Press, 1981, pp. 4-6.
- (13) Damrongrachanuphap, Somdet phrachaoboromwongthoe krom phraya, *Sadaeng banyai Phongsawadan Sayam*, Khurusapha, B. E. 2492 (1949).
- (14) *ibid.*, p. 16.
- (15) *ibid.*, p. 17.
- (16) Phiriya Krairuk, "Silacaruk Pho - khun Ramkhamhang" *Phasa lae Phasasat*, 8 - 1, 1989, p. 4.
- (17) *op. cit.*, 16 - 17.
- (18) Damrongrachanuphap, Somdet phrachaoboromwongthoe krom phraya, *Laksana kan pokkhong Prathet Sayam tae boran*, Krom Sinlapakon, B. E. 2502 (1959), p. 3.
本書は葬式の際に印刷して参列者に配るいわゆる「葬式本」として何回も印刷されて、ダムロン親王が書き残した名著のうちの一冊である。

- (19) *ibid.*
- (20) *ibid.*, p. 5.
- (21) *ibid.*, p. 6.
- (22) タック・チャルムティアロン著、玉田芳史訳『タイ ―独裁的温情主義の政治―』井村文化事業社、1989, p. 230,
- (23) Wichitramattra, Khun, *Lak Thai*, Odian-sato, B. E. 2506 (1963). 本書は第4版である。1版でどれほどの部数が印刷されていたかは不明であるが、4版も版を重ねているのは、本書が普及していることを示す。
- (24) 中国の史書ではなく歴史小説であるというのは、中国史の時代区分に「封神」の時代、「列国」の時代とか「隋唐」の時代とか、タイ語に翻訳紹介された訳書の呼称を用い、地名、人名もそのなかから用いているからである。中国の歴史小説は18世紀末から100年をかけて、『天地開闢』から『明末清初』まで翻訳されて、かつ出版されている。中国語が読めなくなった在タイ華僑の愛読書であった。
- (25) タイ族と漢族はかつて同じ系統の言語から分かれた言語を用いているという、タイ・漢同祖論をプレー・アヌマーンラーチャトンが *Thai-Chin*, B. E. 2479 (1936) に著している。ただし、これは著者が知っているタイ語と中国語の単語を並べ、音や意味の類似を挙げた語源俗解に類する内容である。
- (26) 立憲革命のもうひとりの推進者プリーディー・パノムヨンは、国名変更に反対であったという。その理由は「シャム」という国名が「三印法典」などに古来用いられてきた国名であること、タイ国外のタイ族を統合しようとする膨張主義を感じる点、英語の名称 Thailand が不自然で不細工であるという。また、第二次世界大戦後に一時、「シャム」に国名をもどしているが、1949年に「タイ」を復活させ、1968年、1974年の憲法改正の度に「タイ」か「シャム」かの論争があったが、その後は「タイ」に落ち着いたようである。詳しくは、Suphot Dantrakun, *Thai ru Sayam*, Santitham, B. E. 2528 (1985) を参照。
- (27) 村嶋英治「タイ華僑の政治活動 ―5・30運動から日中戦争まで―」原不二夫編『東南アジア華僑と中国』アジア経済研究所、1993, p. 346. この論文において、20世紀の初め、ラーマ6世とタイ華僑の言論陣との激しい論争があったことがわかる。また、同氏による論文「タイ国における中国人のタイ人化」岡部達味編『ASEANにおける国民統合と地域統合』日本国際問題研究所、1989は、プレー・パホンポンパユハセーナー政権の華僑政策、ピブーンソンクラーム政権のタイ化政策が詳しく実証されている。

- (28) Nakharin Mektrairat, *Khwa-m-khit Khwa-m-ru lae Amnat Kan-muang nai kan-patiwat Sayam 2475*, Sathaban Sayam Suksa, Samakhom Sangkhommasat haeng Prathet Thai, 2533 (1990), pp. 226-227.
- (29) Krom Wichakan, Krasuang Suksathikan, *Nangsu Rian Sangkhomsuksa, So. 102*, *Prathet khong Rao, Chan Matthayom Suksa Pi Thi 1*, Chabap Prapprung Pho. So. 2533, Khurusapha, B. E. 2535 (1992), p. 16.
- (30) *ibid.*, p. 17.
- (31) Wichitwatthakan, Luang, *Silacharuk Phokhun Ramkhamhaeng*.
- (32) Thamniap Ratthaban, *Prawattisat Sukhothai (Phak 1)*, B. E. 2498 (1955).
- (33) *ibid.*, a-b.
- (34) *L'INSCRIPTION DU ROI RĀMA GĀMĤĤĤĤ DE SUKODAYA (1292 A.D.)*, Editée traduite par George Coedès, *STONE INSCRIPTIONS OF SUKHOTHAI*, Translated by H. R. H. Prince Wan - Waithayakon, Siam Society, 1965.
- (35) Pramot, M. R. W. Seni, *Phokhun Ramkhamhaeng*, B. E. 2515 (1972). 本書にはセーニーによるラームカムヘーン王碑文の英語訳が付されている。また、廉価版としては Pramot, M. R. W. Seni, *Pathakatha Ruang Kan plae kham praphan Thai lae Silacharuk Pho-khun Ramkhamhaeng*, Khurusapha, B. E. 2519 (1976). が出版されて市販されている。
- (36) *ibid.*, p. 1.
- (37) *ibid.*, p. 4.
- (38) *ibid.*, p. 8.
- (39) *ibid.*, pp. 8-9.
- (40) *ibid.*, p. 23.
- (41) この布告については、Krom Sinlapakon, *Prachum Prakat Ratchakan Thi 4 Pho. So. 2394-2404*, B. E. 2511 (1968), Krom Sinlapakon, *Prahum Prakat Ratchakan Thi 4 Pho. So. 2405-2411*, B. E. 2511 (1968), から該当する布告を引用要約した。
- (42) *op.*, cit. p. 26.
- (43) *ibid.*, p. 26.
- (44) 村嶋英治「タイにおける政治体制の周期的転換 - 議会制民主主義と軍部の介入」『ASEAN諸国の政治体制』アジア経済研究所、1987、157ページ。

-
- (45) Yamamoto Tatsuro, "Thailand as it is referred to in the Da - de Nan - hai zhi 大德南海志) at the beginning of the fourteenth century", *Journal of East - West Mari - time Relations*, Vol. 1 (1989), p. 54.
- (46) 石井米雄、吉川利治編『タイの事典』同朋舎、p. 306。
- (47) スコータイが伝統的歴史観によって正のイメージを与えられてきたのに対し、アユタヤが負のイメージを与えられてきたのは、アユタヤの諸王が民衆を奴隷視する無慈悲な絶対君主とされたからである、と石井は見る。石井米雄「タイの中世国家像」池端雪浦『変わる東南アジア史像』山川出版、1994、p. 130.

【資 料】

ラームカムヘーン王碑文 和訳

訳 吉 川 利 治

〔碑文第一面〕私の父の名はシーインタラーティット（Si-Intharathit）、母の名はナン・スアン（Nang Suang）、兄の名はバーンムアン（Ban Muang）という。私には同腹の兄弟5人、男3人、女2人がいた。長兄は幼逝していた。私が19歳のとき、チョート [=現在のメーソート、ビルマ国境付近] 国主（Chao - Muang Chot）のクン・サームチョン（Khun Samchon）がターク国（Muang Tak）を攻撃し、私の父が出撃してクン・サームチョンの左側を攻めたて、クン・サームチョンは右側から攻撃してきた。クン・サームチョンが侵入してくると、わが父の臣下たち（Phrai - fa - na - sai）は散りじりに逃げ出したが、私は逃げなかった。私はベークボン [という名の] 象に乗ってクン・サームチョンと戦った。私はマート・ムアン [という名の] 象と戦って、クン・サームチョンは敗走した。クン・サームチョンの象を倒したことで、父は私にプラ・ラームカムヘーン（Phra - Ramkhamhaeng）という名をつけてくれた。私の父の御世は、私は父につくし母につくした。肉や魚を獲得した時は、父に献上した。酸っぱい果物や甘い果物、美味しいものを得たときは、私は父に献上した。わなや象柵で象を捕獲したときは、私は父に献上した。私が他国に行って、象を得たり、下男（pua）を得たり、下女（nang）を得たり、銀を得たり金を得たりすれば、父に献上した。父が亡くなったとき、兄が継いだ。私は父につくしたように兄につくした。私の兄が亡くなると国の全部が私のものになった。

ラームカムヘーン王（Phok-hun Ramkhamhaeng）のころ、スコータイの国（Muang Sukhothai）は良かった。水のなかに魚が住み、田には稲穂が実った。国主（Chao Muang）は道中の住民から税（Chakop）を徴収しなかった。牛をひいて商いに行く者、馬に乗って売りに行く者、誰か象を商いたい者は商いし、誰か馬を商いたい者は商いし、誰か銀や金を商いたい者は商いした。臣民（Phrai - fa - na - sai）であろうと、王族（Luk Chao）、貴族（Luk Khun）であろうと、誰であろうと亡くなれば、亡くなった父（Pho - chuasua - kham - man）の家屋、一族、装身具、馴象、妻子、穀物、従者（Phrai - fa - kha - thai）、その家系の父のビンロウ樹の林、キンマの木は、ことごとくその子に継承される。一般大衆（Phrai fa）、王族（Luk Chao）、貴族（Luk Khun）であろうと、もし争いが生じたら、事実を取

り調べ、公正にかれらのために裁判する。最賈する者や隠匿する者の側に味方しない。米をみても王は欲しがらないし、財をみても取ろうとしなかった。誰か象に乗って、国の保護を求めてくれば、援助してやった。象もなければ馬もない、男もなければ女もない、銀もなければ金もない[という有力者には]、国が成立するまで、それを十分に与えた。敵や兵士を捕獲したときには、殺したり殴ったりしなかった。入口の門に鐘(Krading)がひとつつり下げてある。市中の顔を覆った庶民(Phrai-fa-na-pok)で、争い事を持っていたり、腹が痛くなり、胸がつかえる思いをしている者は、気軽に王(Chao-Khun)のところへ行き、王がつりさげておいた鐘を鳴らすのであった。国主のラームカムヘーン王が、[碑文第二面]それを聞くと、公正に審問した。スコータイの国の民(Phrai)は誉め称えた。[王は]国中にビンロウの木、キンマの木を植え、ヤシの林も国には多くあった。ハラミツも国に多くあった。マンゴーも国に多くあった。タマリンドも国に多くあった。誰か植えた者の所有になっていた。スコータイの国にはトラパンボーイの池があった。水は澄んでメコン川の水のように美味しい。スコータイの周囲には三重の城壁があり、3400ワー[1ワー=約2メートル]あった。スコータイの人(khon)はお布施をし持戒するのが好きで、よく寄進する。スコータイ国のラームカムヘーン王をはじめ、老若男女、王族も貴族も仏教に帰依していた。安居入りには誰もが持戒し、安居明けには衣を寄進し、一か月後には子安貝を盛った飾り、果物の盛りつけ、花の盛りつけ、肘掛け、枕、従者、僧衣を寄進する。年に二百万もの贈り物がある。森林派(Aran-yajik)[の寺院]から市中の広場に通ずる行列には、太鼓の音、歌声、弦の音が響き、踊りたい者は踊り、笑いたい者は笑い、歌いたい者は歌った。スコータイには四つの門があり中央門は人が押し合いして入って、蠟燭を灯し花火をあげた。スコータイの町はわれんばかりであった。スコータイの町の中央には本堂があり黄金仏があり、立った仏像があり、大仏があり、美しい仏像があった。大きな本堂があり、美しい本堂があり、僧がいて、修行僧がいて、高僧がいて、大僧正がいた。スコータイの西方には森林派があり、ラームカムヘーン王はこの町の僧よりも深く三蔵経を学んできた知識のある大僧正、高僧に帰依した。「この僧たちは」ナコーンシータンマラート(Muang Sithammarat)からやって来た僧ばかりである。森林派の中心には、大きな美しい本堂があり、立った仏像が一体ある。スコータイの東側には本堂があり僧がいる。大きな池があり、ビンロウの林があり、キンマの林があり、畑があり田があり、建物があり、大きな村、小さな村があり、マンゴーの林がありタマリンドの林があり、絵に描いたように美しい。[碑文第三面]スコータイの北側には、市場があり、アチャナ仏像があり、本堂があり、ヤシの林があり、ハラミツの林があり、畑があり田があり、建物があり、大きな

村、小さな村がある。スコータイの南側には、庫裏があり本堂があり、僧がいる。ダムがあり、ヤシの林があり、ハラミツの林があり、マンゴーの林があり、タマリンドの林があり、滝があり、プラカプン〔という山〕がある。この山の神聖な精霊（Phi - Thepda）はこの国のどの精霊（Phi）よりも偉大である。このスコータイの国を支配する王（Khun）が正しく祭祀すれば国は安泰である。祭祀しなかったり、正しく祭祀しなければ、この山の精霊は加護せず、国は滅びる。1292年辰年、このシーサッチャナーライ・スコータイ（Sisatchanalai - Sukhothai）の国主（Chao Muang）ラームカムヘーン王がサトウヤシの木を植えて14年、石工に石の台座を作らせて、サトウヤシの〔林の〕中央に安置した。新月の日、白月8日、満月の日、黒月8日の日には僧や高僧がその石の台座に座り、持戒する在家の信者に説経する。お経のない日にはシーサッチャナーライ・スコータイの王ラームカムヘーン王が石の台座に座って王族や貴族たち、国を治める人物たちと政治を行なった。新月と満月の日にはルーチャークリーという名の白象の左右の象牙に黄金を貼りつけ、その象に乗って森林派へ参詣した。チャリアン国（Muang Chaliang）に石碑のひとつを仏舎利と一緒に安置した。もうひとつの石碑はサムパーイ川の川岸のプララーム（Phra - Ram）洞窟に安置した。もうひとつの石碑はこのサトウヤシの林の中央に安置した。ここには休憩所がふたつあり、ひとつをプラマートといい、もうひとつをプッタサーラーといった。石の台座はマナンシラーバート（Manang - Silabat）といい、ここに安置してあるので誰でも見ることができる。

〔碑文第四面〕シーインタラーティット王の子ラームカムヘーン王はシーサッチャナーライ・スコータイの王であるばかりでなく、天空下の国（Muang）、マー（Ma）、カーオ（kao）、ラーオ（Lao）およびタイ・・・ウー川、メコン川の〔流域に住む〕タイ（Thai）〔の王である〕。1207年ブタの年〔A. D. 1285年〕仏舎利を掘り出して皆に見せ、一か月と六日間の供養を行なった後、シーサッチャナーライの中心に埋め、その上に仏塔を建立した。そして3年かけて仏塔の周囲に石の城壁を築造した。以前にはタイ文字はなかった。1205年ヒツジ年〔A. D. 1283〕ラームカムヘーン王はタイ文字をお考えになった。タイ文字は王によって誕生した。ラームカムヘーン王は諸々のタイ族の王者（pen Thao, pen Phraya）であり、タイ族に仏教の徳と法を教えた教師であり、タイ国（Muang Thai）では、確固とした意志を持ち、勇敢で、力強く、比類なき人物であり、敵を平定して、国を広げ多くの象を獲得した。東の方を平定してサルワン（Saluang）、ソーンクウェー（Songkhwae）〔＝ピサヌローク〕ルンバーチャーイ（Lumbachai）、サカー（Sakha）、メコン川方面は、ウエンチャン（Wiangchan）〔＝ビエンチャン、現ラオスの首都〕、ウエンカム（Wiangkham）

に至り、南の方にはコンティー（Khonthi）、プラバーン（Phrabang）〔＝ナコーンサワ
ン〕、プレーク（Phraek）〔＝サンブリー、チャイナート県〕、spanナプーム（Suphan-
naphum）〔＝spanブリー〕、ラーチャブリー（Ratchaburi）、ペッチャブリー（Phetch-
aburi）、シータンマラート（Sithammarat）〔ナコーンシータンマラート〕の海岸に至る。
西の方面はムアン・チョート（Muang Chot）〔＝メーソート、ビルマ国境〕、ムアン・ホン
サーワディー（Muang Hongkawadi）〔＝ハントワディ、ビルマ〕に至り、海洋が国境とな
る。北の方はムアン・プレー（Muang Phrae）、ムアン・マーン（Muang Man）、ムアン
・・・、ムアン・プルワ（Muang Phlua）〔＝プワ、ナーン県〕、メコン川を越えてムア
ン・チャワー（Muang Chawa）〔＝スワー＝ルアンプラバーン、ラオス〕至る。村の人々、
町の人々を徳をもって慈しんだ。

—終—